

「相中相高百年史」より
(戦時体制下の相馬中学校 13)

10 学徒動員：三年生（相中第45・46期生等）・・・ペンをハンマーに
《 横浜・海軍航空技術廠支廠へ出動 》

(4) 機銃掃射をあびながら

ここでは大井博之^(※1)（現相馬市大井病院長）の回想録を紹介してみよう。

毎日、技術廠に出勤するのはよいが、1945（昭20）年の春ごろからは空襲も激しくなり、機銃掃射にも度々遭遇することになった。動員中のある日、航空技術廠の鋳物工場に出勤してまもなく、空襲警報発令になり、自分等が掘った防空壕に退避した。しばらくして「工場火災、ただちに消火班出動！」という命令がきたので、外に出てみたが火災はない。ただ遠くの追浜工場が襲われているらしく、聞き慣れない戦闘機の爆音が聞こえてきた。とにかく鋳物工場に走った。ところが消火班を指揮していた筈の海軍技術将校が、部下の我々を置き去りにして脱兎のごとく逃げ出したのではないかと。それに気付いた我々も後を追って壕に向かったが、回れ右するとドン尻になり逃げ後れてしまった。

追浜を空襲した艦載機は、そのまま我々がいる空技廠めがけて殺到し、鋳物工場も機銃掃射の洗礼を受けた。乾燥炉の陰にうずくまって弾丸を避け、爆音が遠のいた透きに防空壕までの百メートルを全速力で走ったが、見付かかってしまい、敵は急降下して我々に向かって機銃掃射をしかけてきた。

その爆音で物凄い衝撃をうけ、心臓も肺も潰れそうだった。必死の思いで防空壕に転がり込み、入り口の防護壁を回ったときは、「やれやれ、これで助かった！」と思った。空襲が終わってその防護壁を見たら、機銃弾が八発打ち込まれていた。明らかに私等を狙って撃ったことは確かで、あやうく戦死第一号になるところだった。

ここで、同じ工場にいた山梨県立都留中学の山口育三氏の体験を紹介したい。

1945（昭20）年二月十六日朝、工場到着と同時に空襲警報のサイレン…グラマン艦載機が三十機程、…編隊を組んで攻撃してきた。外で工場の守備についている海軍の兵士や学徒兵にむかって、機銃掃射を浴びせてきたのである。

追浜飛行場からも海軍の飛行機が飛んでこれに応戦し、岡の上の高射砲も一斉に火を吹き、空中戦と対空射撃が展開された。その音は耳をつんざくばかりの凄まじさで、工場は焼け、多くの人が戦死した。 ……………

私も「しまった」と思う間もなく、全身を殴られたような感じで倒れてしまった。 ……………

病院に運ばれて行ってみて驚いた。高射砲陣地で応戦していた兵隊さんが、機銃掃射で、頭や胸あるいは足に何発もの銃弾を受けて運ばれてきている。虫の息の人もある。息絶え絶えの兵隊さんが苦しむがれに、「苦しい、殺してくれ！」と叫んでいる。そんな声があちこちから聞こえる。妻子の名前や、両親の名前を呼んでいる。まさに、病院の中は阿鼻叫喚（大勢の人が、むごたらしいめにあって、苦しみをさげふこと）の生き地獄だ。……軍医は重傷者から治療に当たった。しかし、軍医も、看護婦も足りない。そんな中で、時間の経過とともに重傷者は息を引き取っていくしかなかった。なんと可哀相なことだろう。年は二十歳をちょっと越した位の兵隊さんが多い。

……次々と他界して行くこれらの戦友のまわりは、嗚咽の音が絶えなかった。私もこの狭い野戦病院の病床に呻吟しながら、死んでゆくこの兵隊さんに対し、涙が止めどなく流れ落ち、抑えても抑えても抑えきれなかった。

このとき、我々相馬中学の三年生がすぐ近くにいたことはいままでのない。防空壕には、みんな厄介になったものだ。機銃掃射は、狙い撃ちだから「ちょっと遅れりゃあの世行き」だ。だんだん空襲の周期も短くなってきたことは明らかで、空襲警報が発令になると、生きた心地はしなかった。

(※1) 高第1回 昭和24年卒 中村出身